

プロフィシエンシー研究の魅力とインパクト

鎌田 修（南山大学）

キーワード：プロフィシエンシー、OPI、横フリ・縦フリ、接触場面、教材・テスト作り

1. プロフィシエンシーとは

1. 1 テスト用語としてのプロフィシエンシー

テスト用語としての「プロフィシエンシー (proficiency)」は到達度を示す「アチーブメント (achievement)」とは対比的に用いられ、習熟度、堪能度等と訳される。語学教育環境においては予め設定された課題をどこまで達成したかを示すのがアチーブメントで、一方、どれだけ準備したかなどとは関係なく受験時においてどれだけ力を発揮したかを示すのがプロフィシエンシー、つまり、「実力テスト」ということになる。

1. 2 外国語教育史上の位置付け

プロフィシエンシーは言語能力の「実力」を表すが、外国語の「実力」とは何かということについては外国語教育史上、様々な考えが打ち出されてきた。外国語話者との接触が容易ではなかった頃は翻訳能力しか問えなかったが、第二次世界大戦後急速に発達した交通、通信の影響から実際の外国語使用能力が問われるようになった。そのような流れの中、未だ文法翻訳法に偏っていた 1980 年代の米国の外国語教育法に対し、時の大統領ジミー・カーターは米国人の外国語能力を刷新すべく国家的課題として「使い物になる」外国語の教育の推進を図った。それは「プロフィシエンシー志向の外国語教育」と称され、外国語に対する知識の量を問題にするのではなく、現実の生活において外国語を使ってどのような言語活動が、どの程度、遂行できるのかを示す「プロフィシエンシー」の向上を目指した教育、学習が行われるべきだという運動に発展した。

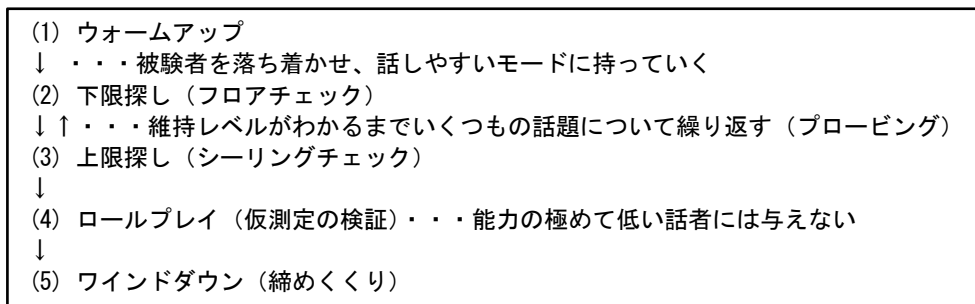
2. OPI の場合

プロフィシエンシー、つまり、現実生活における言語活動の遂行能力の程度を示す概念がはっきり具現化するのには口頭面であるが、その能力を客観的に測定、評価するのは容易ではない。実際、日本語能力試験 (Japanese Language Proficiency Test) は読む、書く、聞く能力の測定においては 30 年以上の開発歴を持つが、未だ、口頭面について全く示せるものがない。そのような背景のもと、開発されてきたのが「OPI (Oral Proficiency Interview)」という面接による口頭能力測定法である。

2. 1 概観

OPI は最大 30 分の時間制限における対面式インタビューによって外国語話者の口頭能力 (Oral Proficiency) の上限と下限を探り出し、そこから最も安定したレベルを見定め、結果を ACTFL Oral Proficiency Guidelines (全米外国語教育協会口頭能力評価基準、以下「口頭能力評価基準」) に照らし合わせ、最終的な評価を下す。OPI は 80 以上の言語に適応され、極めて一般化されたものだが、個々のインタビューはインタビューイー (以下、「被験者」) 自身を主体にして話題を展開させるため、他とは全く異なる様相を示す。

図1 OPIの構造（どの言語にも共通）



OPIは口頭能力を評価するテストには違いないが、Oral Proficiency Test と呼ばないように、(1)自然なインタビューを展開する。そのため、面接者（Interviewer、以下「テスター」）は目の前にいる被験者自身に立脚した自然な話題を提供する。いわゆる、「質問のため質問」は厳禁で、部外者から見るとあたかもおしゃべりだけしているような印象を与えるが、実は、その過程において、被験者のそれ以下には下がらない能力レベル、つまり、(2)「下限」（フロア）とそれ以上には上がらない、(3) 上限（シーリング）を様々な話題を与えることにより見定め、もっとも安定したレベルを探り出し、仮判定を下す。その後、面接モードでは判断できない現実生活場面を(4)ロールプレイで設定し、仮判定の検証を行い、最後に被験者は十分に話し切ったという満足感、そして、テスターはしっかり被験者のプロフィシエンシーが把握できたという満足感を得て、インタビューを(5)で締めくくる。

テスター資格に母語話者であるかどうかは問わないが、かなり高いプロフィシエンシー・レベルとインタビュー技術を持たなければ、制限時間内に能力判定に必要な自然で、かつ、量的、質的に十分な発話データを集めることはできない。前述の「口頭能力評価基準」の中身と底に流れる理論的基盤をしっかり理解しなければならない。

2. 2 測定と評価基準

最大 30 分のインタビューで得られた発話データは「口頭能力評価基準」に基づき、初級、中級、上級、超級の大区分り、さらに、初級から上級までのそれぞれに「-上/中/下」の下位区分、合計 10 段階のレベルのどれかに判定が下される。判定は、まず、被験者の発話データ全体に見られる**機能的言語能力（総合的タスク）**をどれほどこなせるかを分析し、それから、どのような難易度の**話題、内容**が処理できたか、また、発話そのものの**正確さ**（文法、音声などがどれほど聞き手にとって聴きやすいものであったか）、最後に、**テキスト**と言われる発話の表層はどうであったか（語句だけか、文だけか、あるいは、文の羅列か、段落を構成していたかなど）を検討し、最終的な判定を下す。評価上の重要度もこの順序であり、まず、どのレベルの総合的タスクが達成できたのかを判定し、それから、どのレベルの話題/内容、そして、正確さ、最後に、表層的なテキストの表れを見て総合的判定を下す。口頭能力の判定において最も大切なことは、「何ができるか」であり、語彙、文法能力を問うものではない。

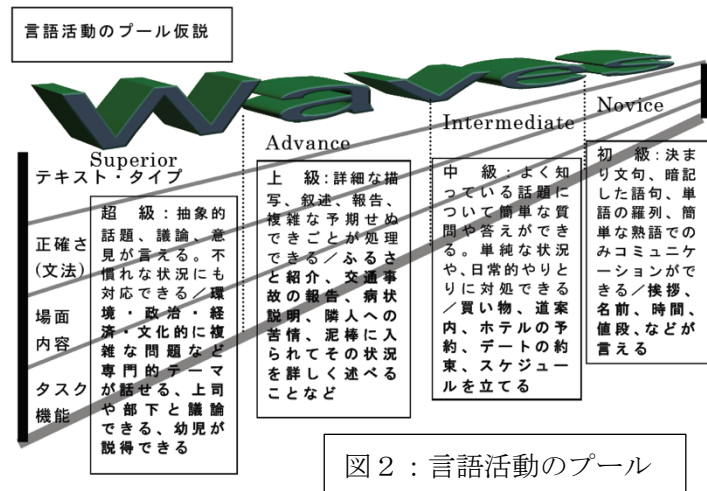
熟練したテスターはこれら 4 つの要素それぞれの難易度を決定する条件が何であるかを知り、また、インタビューにおいて採集される極めて個人差の高い発話を瞬時にレベル分けし、その被験者の「上限」と「下限」を見極め、仮測定が終われば、それを検証するロールプレイを与え、最終的な判定を下す。このことは私たちの言語生活は様々な難易度からなる言語活動の集まり（プール）からなっていると考えると分かりやすい。下の図 2 はそれぞれのレベルの機能能力と具体的な活動例を示す。中級の場合、機能能力は「よく知っている話題について簡単な質問や答えができる。単純な状況や日常的やりとり

対処できる」。その具体例は「買い物、道案内、～」となる。テストはこれらのことをしっかり頭に収め、波の大きさ（課題の難易度）を調整しながら、被験者の上限と下限を探るのである。口頭能力はこの口頭面に関わると考える。

2. 3 レベルの確定：横フリ、縦フリ

OPI テスターは被験者自身に立脚した話題（タスク）を必要最大限取り上げ、そこから自然な会話を展開し、それぞれのタスクの出来具合から能力の下限と上限を

見つけ出し、もっとも安定した（これ以上も上がらない、これ以下にも下がらない）**維持レベル**を見つけて出す。つまり、同じ難易度だが、異なる話題／内容のタスクを複数与え、それらが同様に達成できれば、そのレベルを維持していることになる。例えば、上級であるためには、遭遇した交通事故の状況説明だけでなく、ある病の症状、手の込んだ料理の作り方、気むずかしい料理人の行動説明等々へと横に振られた上級レベルの話題が安定して遂行できなければならない。それが「横フリ」であり、話題間をつなぐ技術である。一方、同じ話題でどこまで深く（高く）話せるかを探る作業が「縦フリ」である。交通事故の詳述だけでなく、事故を防ぐための道路整備、事故後にありがちな救急車の「たらい回し」等について論じられるか、「突き上げ」（あるいは、「突き下げ」）による微調整をレベルの上下間で行うことである。これらの作業は「螺旋的操作」（spiralizing）とも呼ばれ、言語習得研究や外国語教育の研究には欠かせない概念であり、OPI の中で行うマイクロレベルの作業だけでなく、OPI（インタビュー）という枠を超え、外界における言語活動との繋がりを目指すマクロレベルの作業としても重要である。



3. プロフィシエンシー研究のインパクト

プロフィシエンシーは口頭面だけでなく Writing, Listening, Reading においてもそれぞれの評価基準が作成され、また、テストの養成も行われている。ただ、それら全てに共通しているのは、総合的タスクの遂行における機能的言語能力の重視という点である。この点を踏まえ、ここでは、前節に述べた「横フリ」「縦フリ」のマクロレベルに焦点を当て、プロフィシエンシー研究の意義を唱える。

3. 1 接触場面研究

ほとんどの OPI は仮判定が終わった頃、面接以外の現実場面においてもその判定が適切なものかを検証するためロールプレイが実施される。本来なら、被験者を外に連れ出し、検証すべきであろうが、インタビューの途中でそうするのは無理である。しかし、OPI と離れ、教室内で学習したことが教室外で適用できるかどうかを調べるのは自然な流れである。実際、Alice Omaggio Hadley (1986, 1993, 2001) はプロフィシエンシーを志向した外国語教育について書いた名著 *Teaching Language in Context* において極めて示唆的な仮説：（プロフィシエンシーを向上させるには）「目標言語文化圏において遭遇する可能性の高い様々なコンテキストを背景にしたことばの練習を行うべきである」を提示した。全く妥当な主張であるが、これらをより現実的な課題として取り上げたのが、J.V.ネウストプニー（1995: 186）の接触場面仮説「外国語教育の目的がその言語の運用能力の育成にあるとするならば、その学習者がどのようにその言語を使用しているかを調べることは外国語教育の出発点であり、到達点でもあろう」で

ある。Omaggio Hadley がかなり理想的な母語話者場面を想定しているのに対し、ニューストニーは混沌とした現実場面を出発点、到達点として捉えている点は注目に値する。何れにせよ、学習者を主体に捉えるプロフィシエンシー志向の外国語教育にとって学習者自身がどのような場面に遭遇し（あるいは遭遇すべきか）、どのようにコミュニケーション能力を養っていくかを観察することは外国語学習の原点であることに違いない。

3. 2 プロフィシエンシーを志向した日本語教育：学習者主体の教材・テスト作成、教員育成

「接触場面」に外国語学習の基盤を置き、その場面において、ことばの運用レベルを示すことを目的とするプロフィシエンシーとは、「いま、ここで、あなたは当該の外国語を使って何が、どのように、どの程度できるか」ということを示す概念であるといえよう。自然なありのままの日本語を材料とした教材の作成、テスト作り、さらに言語研究へと広範囲の研究領域を持つ。ここではそのような理念を背景に筆者や本シンポジウムのメンバーが関わってきた教科書やテスト作り、言語研究をいくつか紹介する。

【プロフィシエンシーを志向した教科書】

- 1) 『生きた素材による中級から上級への日本語』（鎌田修他、1998、2012 改定、ジャパンタイムズ）
- 2) 『大学生になるための日本語』（堤良一、長谷川哲子、2009 年、ひつじ書房）
- 3) 『生きた会話を学ぶ中級から上級への日本語なりきりリスニング』（鎌田修、奥野由紀子、金庭久美子、山森理恵、2016、ジャパンタイムズ）
- 4) 『中級からの日本語プロフィシエンシーライティング』（由井紀久子他、2012、凡人社）
- 5) 『できる日本語』（嶋田和子監修、2012-、アルク.初級～中級、読解、漢字、文法などシリーズとしてまとめた教科書）

【プロフィシエンシーを志向した大型科研プロジェクト：基盤研究 (A)】

- 1) 「多元性のある日本語教育教材研究及び作成—欧州広領域での使用を目指して—」（2000-2003）
- 2) 「日本語会話能力テストの研究と開発：国内外の教育環境及び多文化地域社会を対象に」（2013-2016）
- 3) 「JOPT の拡充と普及：汎用性と実用性に富む日本語口頭能力試験の実現」（2017-2020）

【プロフィシエンシーを志向した言語分析】

- 1) 『談話とプロフィシエンシー』（鎌田修、堤良一、嶋田和子、定延利之編著、2015、凡人社）

4. むすび

プロフィシエンシーは学習者自身が置かれた環境に基づき、そこから学習者自身が主体的に言語的成長を果たすべきだと考える。中国国内における日本語教室の内外においても十分にその考えに基づいた日本語教育が展開され、また、成長する基盤があるのは当然のことである。

注

1) 2013 年より「超級」を超える「卓越級」(Distinguished) が設けられたが未だ公的な判定レベルとしては使用されていない。

参考文献

鎌田修、嶋田和子、三浦謙一（近刊）『OPI による会話能力の評価～テストニング、研究、教育に生かす～』, 凡人社。
ニューストニー, J.V. (1995) 『新しい日本語教育のために』 大修館書店

American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL), 2012 ACTFL Proficiency Guidelines -Speaking
Omaggio Hadley, A. (1st 1986, 2nd 1993, 3rd 2001) *Teaching Language in Context*, Heinle & Heinle, Boston: Mass.